

茨木市における男女共同参画の取り組みの現状と課題 ——「茨木市男女がともにつくるまちづくり市民意識調査」分析より——

善積 京子・藤井紫津子*

吉田 依子*・谷本 智子*

Current Status and Issues of Gender Equality Policy in Ibaraki :

An Analysis of the “Ibaraki City Attitude Survey on
Men and Women’s Coparticipation in Town-Making”

Kyoko YOSHIKUMI, Shizuko FUJII, Yoriko YOSHIDA, Tomoko TANIMOTO

要 約

本稿の目的は、「平成28年度茨木市男女がともにつくるまちづくり市民意識調査」の結果分析から、「茨木市立男女共生センター ローズWAM」の活動およびセクシュアル・ハラスメントやDVに関する現状を把握し、今後の市としての取り組み課題を考察することにある。

ローズWAM利用状況により「利用型」「利用なし型」「不知型」に分類してその特徴を捉え、各タイプに合わせた事業展開の重要性を指摘。女性の「利用なし型」に向けては、正規就労が多く、夜間や休日の講座開催などライフスタイルに合わせた企画が必要である。男性の「利用型」では、社会活動に積極的という特徴があり、自治会や防災などの社会活動に携わる男性をターゲットに広報することが効果的である。DVやセクシュアル・ハラスメントについては、DV行為を受けていてもそれをDVと捉えていない人が多い。DV被害男性では、暴力の認識で「場合による」の回答が多く、性別による固定観念に縛られ、自分自身が「暴力の被害者である」と認識することが妨げられている。DV防止の広報のさらなる充実とともに、男性が相談しやすくなるようなサポートシステムを編み出していくことも重要な課題としてある。

キーワード：男女共同参画社会、DV、セクシュアル・ハラスメント、茨木市、ローズ
WAM

*茨木市 市民文化部 人権・男女共生課職員

はじめに

茨木市では、国の「男女共同参画社会基本法」に基づき、男女が互いの人権を尊重し合い、いきいきと暮らすことができる男女共同参画社会の実現をめざして、平成4年に「茨木市女性問題総合施策」を策定し、平成12年4月には活動拠点として「茨木市立男女共生センター ローズWAM」を開設した。また、市民とともにつくる男女共同参画社会をめざして、平成14年3月に「茨木市男女共同参画計画」、さらに10年後の平成24年6月には「第2次茨木市男女共同参画計画」を策定した。そして、この第2次茨木市男女共同参画計画の策定から5年が経過した平成28年には、国内外の動向や社会経済情勢の変化に対応した適切な施策の推進を図るため、中間見直しを行った。この「第2次茨木市男女共同参画計画」の見直しの基礎資料として実施されたのが、「平成28年度茨木市男女がともにつくるまちづくり市民意識調査」である⁽¹⁾。

少子高齢化の進行など社会情勢の変化に伴って、共働き世帯の増加、多様なライフスタイルを選ぶ人の増加など、男女をとりまく環境も大きく変化してきている。一方、長時間労働を背景とした男女の仕事と生活を取り巻く状況やM字カーブ問題など、課題は多く存在しており、女性の活躍推進や男性の働き方・暮らし方の見直しは重要な課題である。茨木市では、現在、中間見直しを反映した「第2次男女共同参画計画（改訂版）」に基づき、課題の解決に向けたさまざまな取り組みを展開している。男女共同参画施策推進の拠点である男女共生センター ローズWAMでは、男女共同参画に関する情報の収集・提供、各種講座・研修の開催、相談業務などを行ってきた。また、館にオープンな交流スペースを設け、市民の自由な交流・学習活動を支援してきた。

その運営に関しては、開所当初から多くの市民の方が携わり、市民とともに男女共同参画を推進してきたが、開所から18年目を迎えた現在では、館の利用者が固定化しており、新たな層への拡大がすすんでいない状況にある。社会情勢の変化に伴い、ますます、女性も男性も性別に関わりなく活躍することが求められているなかで、ローズWAMの活性化は喫緊の課題となっている。

そこで、私たちは、茨木市における男女共同参画の課題とその解決に向けた有効な施策を検討するため、第2次茨木市男女共同参画計画の見直しに関わった茨木市男女共同参画推進審議会委員である善積京子と人権・男女共生課職員である藤井紫津子、吉田依子、谷本智子で、「平成28年度茨木市男女がともにつくるまちづくり市民意識調査」の結果をさらに分析するための「茨木ジェンダー研究会」を立ち上げ、本研究を行った。

本稿の第1の目的は、この「平成28年度茨木市男女がともにつくるまちづくり市民意識調査」の結果を様々な角度から分析することによって、男女共同参画社会の実現の拠点としてあるローズWAMの現状や課題を把握することである。つまり、現状のローズWAM利用状況を分析す

ることで、どのようにすれば利用者を拡大することができるのか、ローズ WAM の活性化の具体的施策を追究することにある。

また茨木市では、健やかに安心して暮らせる社会の実現を図るため、セクシュアル・ハラスメントや DV に関する取り組みとして、DV 被害者の保護等の他、DV やデート DV に関する啓発や講座を行ってきた。しかしながら、その反人権の意識が市民にどの程度浸透しているのかがわかりづらい状況にある。そこで、本稿の第2の目的は、セクシュアル・ハラスメントや DV に関する現状を把握し、今後どのような取り組みが必要であるのかを考察することにある。

1. 茨木市立男女共生センター ローズ WAM の利用者の分析

市民意識調査では、「男女共生センター ローズ WAM をご存知ですか」という設問を設け、「知っており、利用したことがある」「知っているが、利用したことがない」「知らない」の3つの選択肢から、市民のローズ WAM の認知度・利用状況を測定した。

その結果、全体では「知っているが、利用なし」（利用なし型）が45.9%と最も多く、次は「知らない」（不知型）が27.2%で、「知っており利用」（利用型）は最も少なく23.7%であった。性別で見ると、女性では「知っており利用」（利用型）が30.1%で、「知らない」（不知型）の18.4%よりも多く、男性では「知らない」（不知型）割合が高く、「知っており利用」（利用型）は15.0%と低く、男女による違いは顕著で、カイ二乗検定では0.000の水準で有意差があった（以下、本稿での有意差検定は、ピアソン相関係数以外は、すべてカイ二乗検定によるものである）。

表 1-1 男女別ローズ WAM の利用状況 (%)

	利用型	利用なし型	不知型	不明	合計
女性	172 (30.1)	281 (49.1)	105 (18.4)	14 (2.4)	572 (100.0)
男性	65 (15.0)	181 (41.8)	169 (39.0)	18 (4.2)	433 (100.0)
その他	3 (50.0)	2 (33.3)	1 (16.7)	0 (0.0)	6 (100.0)
全体*	240 (23.7)	464 (45.9)	275 (27.2)	32 (3.2)	1011 (100.0)

*回収した1018票から不能票の7ケースを除く

本稿では、どのような人がローズ WAM を利用しているのか、またどのような人が利用していないのか、さらにどのような人がローズ WAM の存在そのものを知らないのか、利用状況を3タイプに分けて、男女別に市民意識調査の他の質問項目とクロスすることで分析していく。

なお、各質問項目で「不明」のケースは除き、表では%で表記する。

1-1 利用者の属性特徴

年齢の特徴

ローズ WAM の利用状況タイプ別に、それぞれ回答者の年齢分布をみると、表 1-2 のように、女性回答者の「利用型」と「利用なし型」は「40～49 歳」が最も多く、「不知型」では他の 2 つのタイプと比較して「70 歳以上」や「20～29 歳」が多い (P=0.000)。

つまり、ローズ WAM は 40 代の女性に最もよく知られており、利用率も高い。一方、20 代および 70 代以上の認知度が低い。なお、男性では年齢の違いによる有意差はみられない。

表 1-2 年齢分布

女性回答者	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70 歳以上	合計(実数)
利用型	7.0%	15.8%	24.6%	18.7%	20.5%	13.5%	100.0(171)
利用なし型	6.1	16.8	23.9	17.9	17.9	17.5	100.0(280)
不知型	16.2	14.3	9.5	6.7	21.9	31.4	100.0(105)

カイ二乗検定 $\chi^2=38.375$ P=0.000

婚姻関係

女性回答者の「利用型」や「利用なし型」では、「婚姻中+事実婚」の割合が高く (7 割以上) が、「不知型」では他の 2 タイプに比較して「離婚・死別」や「未婚」の割合が高くなっている (P=0.000)。なお、男性回答者は WAM の利用と婚姻状況の関係に有意差はみられない。

表 1-3 婚姻関係

女性回答者	未婚	婚姻中+事実婚	離婚・死別	合計(実数)
利用型	10.5%	77.8%	11.7%	100.0(171)
利用なし型	11.4	74.1	14.6	100.0(281)
不知型	17.3	53.8	28.8	100.0(104)

カイ二乗検定 $\chi^2=26.996$ P=0.000

家族類型

女性回答者では、いずれのタイプでも「2 世帯」つまり「夫婦と子からなる世帯」の割合が最も高いが、「不知型」では他のタイプに比べ「1 人世帯」がやや高い (P=0.0210)。

表 1-4 家族類型

女性回答者	1 人世帯	夫婦世帯	2 世帯	3 世帯	その他	合計(実数)
利用型	8.8%	20.6%	62.9%	5.9%	1.8%	100.0(170)
利用なし型	15.0	25.4	52.1	6.4	1.1	100.0(280)
不知型	22.9	27.6	42.9	6.7	0.0	100.0(105)

カイ二乗検定 $\chi^2=17.466$ P=0.026

末子年齢

女性回答者では、「利用型」では他のタイプに比べ末子が「小学生」の割合が高く、「不知型」

では「子なし」「それ以上」の割合が高くなっている ($P=0.000$)。なお、男性回答者では、ローズ WAM 利用と末子年齢の関係に有意差はみられない。

表 1-5 末子年齢

女性回答者	子なし	3歳未満	3歳以上	小学生	中学生	高校生	それ以上	合計(実数)
利用型	16.0%	7.4%	6.8%	17.3%	2.5%	4.3%	45.7%	100.0(162)
利用なし型	22.1	7.0	7.4	7.4	5.1	4.8	46.3	100.0(272)
不知型	32.0	6.2	2.1	1.0	0.0	1.0	57.7	100.0(97)

カイ二乗検定 $\chi^2=40.968$ $P=0.000$

回答者の就労

女性回答者では、いずれのタイプでも「家事従業者」の割合が3割以上で最も高い。次に、「利用型」「利用なし型」では「非正規」が多くなっている。一方「不知型」では「正規就労」や「無職」が他のタイプよりも多い ($P=0.003$)。つまり、ローズ WAM を利用している女性では、「正規就労」の人よりも、「家事専業」もしくはパート・アルバイトなど時間的余裕のある人が多い。なお男性は、ローズ WAM の利用と就労との関係に有意差はみられない。

表 1-6 就労状況

女性回答者	正規就労	非正規・臨時	自営	家族従業員	家事専業	無職	学生	合計(実数)
利用型	15.7%	30.8%	3.5%	1.2%	33.7%	11.0%	4.1%	100.0(172)
利用なし型	19.3	26.4	2.5	3.6	40.0	7.9	0.4	100.0(280)
不知型	20.0	14.3	2.9	1.0	40.0	19.0	2.9	100.0(105)

カイ二乗検定 $\chi^2=30.111$ $P=0.003$

配偶者の仕事の有無

「利用型」「利用なし型」では、「配偶者が働いている」割合は高く、「不知型」では他に比べ、「配偶者無」の割合が高い。

表 1-7 配偶者の仕事の有無

女性回答者	働いている	働いていない	配偶者無	合計(実数)
利用型	59.9%	21.6%	18.6%	100.0(167)
利用なし型	58.6	18.3	23.1	100.0(273)
不知型	40.6	17.8	41.6	100.0(101)

カイ二乗検定 $\chi^2=19.975$ $P=0.001$

以上のように、女性回答者の場合は、回答者の属性によってローズ WAM 利用状況に統計的有意差がみられた。つまりローズ WAM の女性利用者の特徴は、「40代」「既婚者」「二世帯世帯」「末子が小学生」「家事専業」や「パート非常勤職」の層が他のタイプに比べて多い。ローズ WAM の存在を知っているが利用していない「利用なし型」では、「40代」「既婚者」「二世帯世帯」の割合が高い点で「利用型」と類似の傾向がみられるが、「利用型」よりも「子どもなし」

「一人世帯」や「二人世帯」「正規就労」の割合が高い。一方、ローズ WAM の存在を知らない「不知型」では、「未婚」「子どもなし」「正規就労」などの特徴を有する若い層と、および「配偶者と離婚・死別」「高校生よりも大きい子ども」「無職」などの特徴を有する高齢層が他のタイプと比較して多い。

1-2 就労時間、家事時間

労働時間

ローズ WAM を利用するには、その人の生活時間の様態が深く関連しているだろうという仮説のもとで、就労時間や家事時間を尋ねた。労働時間の相違によるローズ WAM 利用状況の違いが男女ともにみとめられた。

女性回答者の「利用型」では「4～6 時間」の労働時間の人が他のタイプに比較して多く、ローズ WAM 利用にパートやアルバイトの人が多くことがうかがえる。「利用なし型」では、他のタイプに比べて「6～8 時間」「8～10 時間」働いている人が多く、それは、正規職員としてフルタイム勤務している人が多いことが反映しているであろう。

「不知型」では、他のタイプに比較して「労働時間がない」人の割合が多く、高齢者で無職の人が多くことが関連していると推測される。

表 1-8-1 就労時間

女性回答者	なし	4時間未満	4～6 時間	6～8 時間	8～10時間	10～12時間	12時間以上	合計(実数)
利用型	25.2%	11.5%	20.5%	13.7%	17.6%	6.9%	4.6%	100.0(131)
利用なし型	33.8	7.3	11.1	19.2	19.7	8.1	0.9	100.0(234)
不知型	43.8	5.0	12.5	5.0	20.0	11.3	2.5	100.0(80)

カイ二乗検定 $\chi^2=28.621$ P=0.004

労働時間については、男性でもカイ二乗検定で P=0.016 の水準で有意差がみられた。「利用型」では他のタイプと比較して「4 時間未満」「6～8 時間」「12 時間以上」の割合が多く、パートやアルバイトの人、「正規雇用」でも時間外労働のない人、反対に長時間勤務の人など、さまざまな就労時間の人が利用している。一方、「利用なし型」では、「8～10 時間」割合が最も多い。「不知型」でも「8～10 時間」の割合が多いが、それと同時に他のタイプと比較して「労働時間なし」の割合も多い。

表 1-8-2 就労時間

男性回答者	なし	4時間未満	4～6 時間	6～8 時間	8～10時間	10～12時間	12時間以上	合計(実数)
利用型	13.8%	17.2%	5.2%	17.2%	13.8%	15.5%	17.2%	100.0(58)
利用なし型	19.7	7.5	2.9	11.6	26.6	18.5	13.3	100.0(173)
不知型	24.5	4.6	4.0	4.6	27.8	16.6	17.9	100.0(151)

カイ二乗検定 $\chi^2=24.741$ P=0.016

家事時間

女性回答者では、平日の家事時間とローズ WAM 利用状況との間に関連がみられ (P=0.003)、「利用型」では、3 時間以上家事労働をしている割合が多く、つまり、専業主婦やパートが多いことがうかがえる。「不知型」では、他のタイプに比較して、家事労働時間は短い傾向にあり、それは高齢者や未婚の単身者の多いことが関連しているのであろう。

この傾向は女性回答者の休日の家事時間との関係でもみられた (P=0.017)。一方、男性回答者では平日でも休日の家事時間でも、ローズ WAM 利用状況との間に有意な差はみられない。

表 1-9 家事時間 (平日)

女性回答者	なし	30分未満	30分～1時間	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4時間以上	合計(実数)
利用型	6.1%	1.8%	4.9%	12.2%	19.5%	20.1%	35.4%	100.0(164)
利用なし型	6.4	1.9	6.4	14.6	22.8	18.3	29.6	100.0(267)
不知型	11.3	8.2	12.4	15.5	23.7	8.2	20.6	100.0(97)

カイ二乗検定 $\chi^2=30.041$ P=0.003

1-3 社会活動への参加の有無

社会活動とローズ WAM 利用状況とは強い関連性が男女ともにみられる。女性回答者の「利用型」では社会活動に「参加している」「参加してみたい」の割合が他のタイプより多く、「不知型」では「したいと思わない」割合が多い。つまり、ローズ WAM を利用している女性ほど社会活動への積極性が高く、知らない女性ほど社会活動への参加に消極的である (P=0.000)。男性回答者でも、「利用型」は社会活動へ「参加している」割合が他のタイプよりも非常に多く、「利用なし型」では「参加できない」の割合が、「不知型」は「参加したいと思わない」の割合が多い。つまり、ローズ WAM を利用している人は社会活動に積極的で、知らない人では社会活動に消極的である。

表 1-10 社会活動への参加の有無

女性回答者	参加している	参加してみたい	参加できない	参加したいと思わない	合計(実数)
利用型	41.6%	15.7%	16.9%	25.9%	100.0(166)
利用なし型	27.4	11.9	22.6	38.1	100.0(260)
不知型	14.7	12.6	24.2	48.4	100.0(95)

カイ二乗検定 $\chi^2=27.940$ P=0.000

男性回答者	参加している	参加してみたい	参加できない	参加したいと思わない	合計
利用型	42.9%	14.3%	17.5%	25.4%	100.0(63)
利用なし型	20.8	17.3	30.1	31.8	100.0(173)
不知型	15.2	19.4	26.1	39.4	100.0(165)

カイ二乗検定 $\chi^2=22.647$ P=0.001

1-4 ジェンダー・男女共同参画に関する意識と知識

「言葉・仕草は女らしく、男らしくしつけるのがよい」

「言葉使いや仕草など、女の子は女らしく、男の子は男らしく、しつけるのがよい」という意見に対して、女性回答者では、ローズ WAM 利用タイプによる統計的有意差がみられた (P=0.001)。女性の「利用型」では「そう思わない」の割合が、「利用なし型」では「どちらかというところ思う」の割合が、「不知型」では「そう思う」割合が、他のタイプよりも高い。つまり、ローズ WAM 利用の女性に、より「性別役割分担意識」に反対の傾向がみられる。

表 1-11 「言葉仕草は女らしく、男らしく」

女性回答	そう思う	どちらかというところ思う	どちらかというところ思わない	そう思わない	わからない	合計(実数)
利用型	27.2%	46.2%	7.7%	18.9%	0.0%	100.0(169)
利用なし型	23.3	53.0	11.5	9.6	2.6	100.0(270)
不知型	39.8	41.8	10.2	6.1	2.0	100.0(98)

カイ二乗検定 $\chi^2=25.937$ P=0.001

学校の生活の中で、固定的性別役割分担

また、女性回答では小・中学校の生活の中で、「固定的性別役割分担を行わない」ことが重要と「思わない」割合は、「不知型」では他のタイプに比較してやや多い (P=0.025)。つまり、ローズ WAM を知っている女性ほど「固定的性別役割分担を行わない」ことが重要と考える傾向にある。

表 1-12 「固定的性別役割分担を行わない」ことは重要

女性回答	思う	思わない	合計(実数)
利用型	46.7%	53.3%	100.0(169)
利用なし型	44.3	55.7	100.0(273)
不知型	30.7	69.3	100.0(98)

カイ二乗検定 $\chi^2=7.341$ P=0.025

DV の認識

市民意識調査では、(2 節で後述するように) 10 項目に関して、その行為を暴力だと思うかどうかを質問した。女性回答者の「不知型」では「暴力にあたる」という割合が他のタイプに比べ少なくなる傾向が「生活費を渡さない」(P=0.006)、「メールなど監視」(P=0.008)、「なぐる、ける」(P=0.037) の項目でみられる。

表 1-13-1 女性回答者の DV の認識

生活費を渡さない	暴力にあたる	場合による	暴力と思わない	合計(実数)
利用型	75.8%	21.8%	2.4%	100.0(165)
利用なし型	72.5	19.6	7.9	100.0(265)
不知型	58.2	32.7	9.2	100.0(98)

カイ二乗検定 $\chi^2=14.501$ P=0.006

メールなど監視	暴力にあたる	場合による	暴力と思わない	合計
利用型	57.8%	38.6%	3.6%	100.0(166)
利用なし型	58.1	33.2	8.7	100.0(265)
不知型	45.4	39.2	15.5	100.0(97)

カイ二乗検定 $\chi^2=13.814$ P=0.008

なぐる・ける	暴力にあたる	場合による	暴力と思わない	合計
利用型	93.9%	4.8%	1.2%	100.0(165)
利用なし型	93.6	6.0	0.4	100.0(267)
不知型	84.8	14.1	1.0	100.0(99)

カイ二乗検定 $\chi^2=10.233$ P=0.037

一方、男性回答者では、ローズ WAM「利用型」での「暴力にあたる」と回答する割合が他のタイプに比較して、「どなる」(P=0.026)や「人格否定の言葉」(P=0.038)の項目で高くなっている。

表 1-13-2 男性回答者の DV の認識

どなる	暴力にあたる	場合による	暴力と思わない	合計(実数)
利用型	58.3%	36.7%	5.0%	100.0(60)
利用なし型	41.3	49.4	9.3	100.0(172)
不知型	34.0	54.7	11.3	100.0(159)

カイ二乗検定 $\chi^2=11.043$ P=0.026

人格否定の言葉	暴力にあたる	場合による	暴力と思わない	合計
利用型	82.0%	13.1%	4.9%	100.0(61)
利用なし型	65.1	30.3	4.6	100.0(175)
不知型	67.7	23.4	8.9	100.0(159)

カイ二乗検定 $\chi^2=10.130$ P=0.038

以上のように、女性回答者ではローズ WAM を知っている層で、男性回答者ではローズ WAM 利用者の層で、DV の認識は高い。また、ローズ WAM 利用状況による違いがみられる項目は男女で異なり、女性回答者では「生活費を渡さない」「メールなど監視」「なぐる、ける」の項目で、男性回答者では「どなる」「人格否定の言葉」の項目で有意差が認められる。

男女共同参画に関する知識

市民意識調査では、「男女共同参画社会」「女子差別撤廃条約」「男女雇用機会均等法」「DV 防止法」「女性活躍推進法」「ワーク・ライフ・バランス」「LGBT」など男女共同参画に関連した14個の用語について知っているかどうかを質問した。各項目の選択肢の「よく知っている」を2点、「聞いたことがある」を1点、「知らない」を0点として、合計得点を算出した上で、この知識得点を基にして、下記の6タイプに分類した。1型（知識得点0点）、2型（知識得点が1～5点）、3型（知識得点が6～10点）、4型（知識得点が11～15点）、5型（知識得点が16～20点）、6型（知識得点が21点以上）。

女性回答者のローズ WAM「利用型」では知識得点が11点以上の4型、5型、6型の割合が他のタイプに比べて多く、「不知型」では全ての項目についてまったく知らない「1型」が4割以上を占めて多い。「利用なし型」では知識得点が6～10点の「3型」が多い。つまり、ローズ WAM を利用している人ほど、男女共同参画に関連した用語をよく知っている（ $P=0.000$ ）。

この傾向は男性回答者ではさらに鮮明に表れている。男性の「利用型」では知識得点が16点以上の5型、6型の割合が他のタイプに比べて多く、「不知型」では知識得点0点の「1型」や1～5点の「2型」が他のタイプに比べて多く、「利用なし型」では「3型」「4型」が多い（ $P=0.000$ ）。

このように、ローズ WAM 利用状況と男女共同参画に関連した用語知識との間には強い相関関係がみだされ、ローズ WAM 利用者ほど男女共同参画に関連する用語の知識をもっている。

表 1-14 男女共同参画に関する用語知識度タイプ

女性回答者	1型 0点	2型 1～5点	3型 6～10点	4型 11～15点	5型 16～20点	6型 21点以上	合計(実数)
利用型	19.2%	1.3%	34.4%	25.2%	13.9%	6.0%	100.0(151)
利用なし型	25.9	4.4	42.6	19.5	6.8	0.8	100.0(251)
不知型	44.0	7.7	31.9	15.4	1.1	0.0	100.0(91)
男性回答者	1型 0点	2型 1～5点	3型 6～10点	4型 11～15点	5型 16～20点	6型 21点以上	合計(実数)
利用型	14.8%	1.9%	35.2%	18.5%	16.7%	13.0%	100.0(54)
利用なし型	17.6	2.4	38.2	31.5	5.5	4.8	100.0(165)
不知型	29.7	12.0	34.8	18.4	5.1	0.0	100.0(158)

DV 相談窓口機関に関する知識

市民意識調査では、さらに「配偶者からの暴力などの相談窓口として、どのような機関を知っていますか」という設問を設け、10種の機関を挙げて質問したところ、用語知識と同様な傾向がみられた。DVの相談機関を「知っている」割合は、ローズ WAM「利用型」では他のタイプよりも多い。表 1-15 のように、特に男性回答者では6機関で統計的有意差が確認された。なお、女性回答者では「ローズ WAM」($P=0.000$)と「大阪府女性相談センター」($P=0.031$)のみに

統計的有意差がみられた。

以上のように、ローズ WAM を利用している人ほど男女共同参画に関する用語だけでなく、DV 相談窓口機関の認知も高く、特にその傾向は男性にみられる。

表 1-15 DV の相談機関を「知っている」割合

男性回答者	ローズ WAM	配偶者暴力相談 支援センター	法務局人権 擁護委員	吹田子ども 家庭センター	大阪府立女性 相談センター	民間専門家・ 専門機関
利用型	43.3%	21.7%	20.0%	11.7%	11.7%	21.7%
利用なし型	35.3	14.7	13.5	5.3	7.1	17.6
不知型	0.6	0.6	5.0	1.9	1.9	9.3
カイ二乗検定 有意水準：P	$\chi^2=75.673$ P=0.000	$\chi^2=29.059$ P=0.000	$\chi^2=12.059$ P=0.002	$\chi^2=9.209$ P=0.010	$\chi^2=9.073$ P=0.011	$\chi^2=7.161$ P=0.028

1-5 男女共同参画に関する茨木市の評価

市民意識調査では、現在の茨木市について、「男女平等の考え方の浸透」「子育て支援策の充実」「介護支援策の充実」「男性の子育て・介護への参画」「市のセクシュアル・ハラスメントやDV など女性に対する暴力への対策」「女性の健康保持に関する支援」の項目から、「自分の経験に照らして」最も近い考えを5つの選択肢（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」「わからない」）を設けて質問した。

女性回答でローズ WAM 利用状況と茨木市評価の間に統計的に有意差のある項目は、「女性の健康保持」「子育て支援策」「男性の子育て・介護」「女性に対する暴力への対策」である。「不知型」では「わからない」が他のタイプに比べて高い。「利用型」では「どちらかといえばそう思う」や「そう思わない」が高く、評価が二分化している。「利用なし型」では他のタイプに比べ「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」に分散傾向がみられる。

表 1-16-1 茨木市の評価 女性回答者

女性の健康保持	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない	わからない	合計(実数)
利用型	4.8%	26.9%	17.4%	16.2%	34.7%	100.0(167)
利用なし型	1.8	24.9	14.7	10.6	48.0	100.0(273)
不知型	3.0	18.8	5.9	6.9	65.3	100.0(98)

カイ二乗検定 $\chi^2=28.712$ P=0.000

子育て支援策充実	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない	わからない	合計(実数)
利用型	3.0%	25.0%	19.6%	23.8%	28.6%	100.0(168)
利用なし型	1.5	19.0	20.9	18.7	39.9	100.0(273)
不知型	3.0	15.0	11.0	16.0	55.0	100.0(100)

カイ二乗検定 $\chi^2=22.320$ P=0.004

男性子育て・介護	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない	わからない	合計(実数)
利用型	0.0%	13.9%	21.7%	28.3%	36.1%	100.0(166)
利用なし型	0.7	6.6	23.2	23.2	46.3	100.0(272)
不知型	1.0	6.1	17.2	17.2	58.6	100.0(99)

カイ二乗検定 $\chi^2=20.101$ P=0.010

女性暴力への対応	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない	わからない	合計(実数)
利用型	0.0%	14.5%	18.1%	13.9%	53.6%	100.0(166)
利用なし型	0.4	10.7	16.5	12.1	60.3	100.0(273)
不知型	0.0	11.1	8.1	4.0	76.8	100.0(99)

カイ二乗検定 $\chi^2=18.027$ P=0.021

一方、男性回答で、ローズ WAM 利用状況と茨木市評価の間に統計的に有意差がみられた項目は、「女性に対する暴力への対策」と「子育て支援策」で、女性回答と同様に「不知型」では「わからない」が他のタイプに比べて高く、「利用型」では「どちらかといえばそう思う」が、「利用なし型」では「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」が他のタイプに比べて高い傾向がみられる。

表 1-16-2 茨木市の評価 男性回答者

性暴力への対応	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない	わからない	合計(実数)
利用型	0.0%	26.6%	15.6%	17.2%	40.6%	100.0 (64)
利用なし型	1.1	10.6	20.8	19.4	48.3	100.0(180)
不知型	1.2	9.3	14.2	13.0	62.3	100.0 (99)

カイ二乗検定 $\chi^2=22.319$ P=0.004

子育て支援策充実	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない	わからない	合計(実数)
利用型	0.0%	15.6%	21.9%	23.4%	39.1%	100.0 (64)
利用なし型	1.1	6.7	27.2	28.1	38.9	100.0(180)
不知型	0.0	7.5	16.8	25.5	50.3	100.0(161)

カイ二乗検定 $\chi^2=20.262$ P=0.009

以上のように、男女ともにローズ WAM の存在を知らない人ほど、茨木市の評価で「わからない」と回答する傾向がある。そしてローズ WAM の女性利用者では茨木市の対策を評価する層と評価しない層に分かれる傾向がみられるが、男性の利用者では「どちらかといえばそう思う」と評価する割合が高くなっている。

2. DV・ハラスメントに関する認識と被害体験の分析

2-1 セクシュアル・ハラスメントや DV に関するこれまでの市の取り組みと現状

茨木市では、セクシュアル・ハラスメントや DV の取り組みを男女共同参画社会の実現に向けた重要な政策の 1 つとして位置づけており、第 2 次茨木市男女共同参画計画（改訂版）においては、基本目標 5「女性に対する暴力の根絶」のなかで、女性に対する暴力を許さない社会づくりや女性に対する暴力への対策の推進、配偶者等からの暴力の防止及び被害者の保護等の推進を掲げている。

茨木市では、これまで DV に対して次のような積極的な取り組みを行ってきた。平成 12 年のローズ WAM 開設と同時に DV 相談窓口を設けている。また、暴力予防啓発に関する講座を平成 12 年から開催し、毎年約 300 人が受講している。平成 20 年からは、公共施設の女性トイレに DV 相談カードを設置し、平成 21 年からは中学生向けにデート DV 予防啓発の冊子を配布し、希望された中学校において、市民ボランティア団体 LAP いばらきによる「デート DV 予防啓発ワークショップ」を実施している。さらに、平成 27 年 4 月には、茨木市配偶者暴力相談支援センターを開設し、そこでの相談件数は平成 27 年度 962 件、平成 28 年度 893 件となっている。

また、計画内の計画推進の指標として、女性に対する暴力防止の啓発や講座の実施回数と参加人数、子ども・若者へのデート DV 防止啓発や講座の実施回数と参加人数、「デート DV」とい

う言葉を「よく知っている・聞いたことがある人」の割合を設定している。

その実績を見ると、進捗状況の推移では、女性に対する暴力防止の啓発や講座の実施回数と参加人数は、2010年の3回／年74人が2015年には6回／年373人と、目標値の10回／年650人には達していないものの、年を追うごとに増加している。子ども・若者へのデートDV防止啓発や講座の実施回数と参加人数については、2010年の15回／年2,975人が2015年には18回／年3,956人と、2016年の目標値の20回／年3,040人をほぼ達成しており、2021年の目標値を27回／年6,000人としている。これらの数値だけみると、DV等への関心が高まっているように見える。ところが一方で、「デートDV」という言葉を「よく知っている・聞いたことがある」という人の割合については、2016年の目標値は女性74.7%、男性71.6%であった。ところが、2010年の実態は女性49.4%、男性43.3%で、2016年にはそれが女性35.5%、男性29.5%と下がっている。このように、これらの実績の推移だけでは、啓発が効果をあげているのか判断しがたい。

そこで、どのような層でセクシュアル・ハラスメントやDVの認知度が低いのか、今後はどのような働きかけが必要なのかを市民意識調査における3つの質問項目（セクシュアル・ハラスメントの被害体験、DV被害体験、DVの認識）を中心にした結果分析から考察することにする。

2-2 セクシュアル・ハラスメントに関する被害体験

市民意識調査では、セクシュアル・ハラスメントについて、「職場や学校や地域などで、次のような行為をされたことがありますか」と質問し、「年齢や身体のことについて、不愉快な意見や冗談を言われる」「卑わいな言葉をかけられたり、わい談をされる」「身体をじろじろ見られる」「わざと身体に触られる」「宴会などでお酌やデュエットを強要」「性的なうわさを流される」「しつこく交際を求められる」「性的な行為を強要される」の8つの行為から被害体験の有無を調べた。

被害体験は7項目では男性よりも女性に多いが、「性的うわさ」は男性も同様に受ける

8つのハラスメント行為のうち、「受けたことがある」の割合の最も多い項目は、「年齢や身体のことについて、不愉快な意見や冗談」である（21.1%）。次は「卑猥な言葉がけ、猥談」で10.7%、「身体をじろじろ見られる」（9.1%）、「わざと身体に触れられる」（8.1%）、「性的なうわさ」（3.3%）、「交際を求められる」（3.2%）、「性的な行為を強要」（1.0%）の順である。

この割合を性別で比較すると、ほとんどの項目では女性の割合の方が多く、統計的に有意差がみられる。例外の項目は「性的なうわさを流される」で、男女の有意差が見られない（ $P=0.519$ ）。つまり、「性的なうわさを流される」という行為は男性も女性と同様に受けている。

セクシュアル・ハラスメント被害体験の得点化による分類

セクシュアル・ハラスメント行為の全項目について有無の回答があったケース（866票）のみを分析対象にすると、少なくとも1項目以上で「受けたことがある」と回答したケースは27.9%であるが、性別で見ると、女性では164件（33.3%）、男性78件（20.9%）となっている。

このハラスメント行為の被害体験の程度を測るために、各ハラスメント項目で「受けたことがない」と回答した場合は0点、「受けたことがある」と回答した場合は1点とし、8項目の合計得点を算出した。その分布は、表2-1の通りである。

表2-1 セクシュアル・ハラスメント被害の得点化

	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	計(実数)
女性	66.7%	14.6%	8.1%	5.1%	1.8%	1.2%	1.8%	0.6%	100.0(492)
男性	79.1	11.8	5.9	2.4	0.3	0.0	0.3	0.3	100.0(374)
計	72.1	13.4	7.2	3.9	1.2	0.7	1.2	0.5	100.0(866)

次に、セクシュアル・ハラスメント被害の得点に基づき、得点0点はIタイプ：「被害体験なし」、得点1点は、IIタイプ「被害体験軽度」、得点2点はIIIタイプ：「被害体験中度」、得点3以上はIVタイプ：「被害体験重度」の4つのタイプに分類する。それぞれのタイプの割合は、「被害体験なし」型が最も多く72.1%、「被害体験軽度」型は13.4%、「被害体験中度」型は7.2%、「被害体験重度」IV型は7.5%となった。

2-3 DV行為の被害体験分析

市民意識調査では、「これまでに配偶者・パートナーや恋人が、あなたに対して次のようなことをしたことがありますか」という質問を行い、「なぐったり、けったり、物を投げたり、突き飛ばしたりする」（身体的暴力）、「人格を否定するような暴言、大声でどなる、長時間無視する、ののしる、脅迫する」（精神的暴力）、「性行為を強要する、避妊に協力しない、中絶を強要」（性的暴力）、「生活費を渡さない、仕事をして収入を得ることを制限する、貯金を勝手に使われる、相談なく借金を重ねる」（経済的暴力）、「外出や親族・友人との付き合いを制限する、電話やメールを細かくチェック」（社会的暴力）、「子どもの前で暴力をふるったり、子どもに暴力をふるう」（子どもを巻き添えにした暴力）の6項目について、それぞれ「まったくない」「1～2度あった」「何度もあった」の選択肢を設けた⁽²⁾。

女性の被害割合が大きい、「精神的な暴力」は男性も受けている

夫婦や恋人の間での暴力で、「あった」（「何度もあった」と「1～2度あった」の合計）の回答が多かった項目は、「精神的な暴力」であった（29.4%）。2番目に多いのが「身体的暴力」で（21.3%）、その後の「子どもを巻き添えにした暴力」、「社会的暴力」「性的暴力」「経済的暴力」

は10%以下である。性別で見ると、全般的に女性の被害体験が多いが、「精神的な暴力」では男女の統計的有意差がない（ $P=0.161$ ）。

DV 被害体験の頻度による分類

暴力行為がDV被害体験の全項目において「全くない」と回答したケースは499件であり、全項目について有無の回答があった有効ケース（866票）のうちの6割を占める。なお、全回収票（1018票）を全体とすれば、49.0%となる。

暴力が「あった」としたケースでも、1項目のみで「1～2度あった」に回答しているケースは119件（女性60件、男性57件、性別なし2件）で、一時的なケースも多い。一方、3項目以上で「何度もあった」と回答しているケースも32件ある。

DV体験の程度により、ケースを分類する必要がある。そこで、被害体験項目数とその頻度から、「I型：DVなし」、「II型：1項目一時型」、「III型：2項目一時型」、「IV型：3項目以上一時型」、「V型：1項目頻繁型」、「VI型：2項目以上頻繁型」の6タイプにケースの分類を行った。

つまり、「I型：DVなし」とは、6項目全てにおいて暴力行為が「全くない」と回答したケース、「II型：1項目一時型」は1項目のみで「1～2度あった」と回答しているケース、「III型：2項目一時型」は2項目においてのみ「1～2度あった」と回答しているケース、「IV型：3項目以上一時型」は3項目以上で「1～2度あった」と回答しているケース、「V型：1項目頻繁型」は1項目において「何度もあった」と回答したケース、「VI型：2項目以上頻繁型」は2項目以上において「何度もあった」と回答したケースである。

表2-2には、それぞれのタイプ別の割合を示している。男女別に比較して見ると、男性では「I型：DVなし」や「II型：1項目一時型」の割合が多く、女性では「III型：2項目一時型」「IV型：3項目以上一時型」「V型：1項目頻繁型」「VI型：2項目以上頻繁型」が多くなっている（ $P=0.000$ ）。

表2-2 DV被害体験の頻度による分類

	I型： DVなし	II型： 1項目一時型	III型： 2項目一時型	IV型：3項目 以上一時型	V型： 1項目頻繁型	VI型： 多項目頻繁型	計(実数)
全体*	60.0%	14.3%	7.5%	4.7%	7.0%	6.5%	100(831)
女性	55.0	12.7	8.3	6.2	9.1	8.7	100(471)
男性	66.6	16.4	6.6	2.9	4.0	3.5	100(347)

*全体には性別不詳を含む

2-4 DV行為の認識分析

同じ行為を受けていても、ある人はそれをDVであると認識するが、他の人はそれをDVだと感じないということがあるだろうと推測される。そこで、DVの被害の有無だけでなく、回答

者の DV 行為の認識度を測定することにした。

市民意識調査では、「あなたは、次のようなことが配偶者・パートナー間や恋人との間で行われた場合、暴力だと思いますか」という質問を、以下の 10 項目についてそれぞれ「どんな場合でも暴力にあたると思う」「暴力にあたる場合もそうでない場合もあると思う」「暴力にあたると思わない」という 3 つの選択肢を設けた。

身体的暴力——①「なぐる、ける」、②「物を投げる」

精神的暴力——③「何を言っても長時間無視し続ける」、④「大声でどなる」、⑤「『誰のおかげで生活できるんだ』、『甲斐性なし』などの人格を否定するような言葉を使う」、⑥「なぐるふりをして、おどす」、⑦「刃物などを突きつけて、おどす」

性的暴力——⑧「いやがっているのに性的な行為を強要する」

経済的暴力——⑨「生活費を渡さない」

社会的暴力——⑩「交友関係や行き先、電話・メールなどを細かく監視する」

DV の認識の揺れと男女の違い

回答者が「暴力である」と認識している割合の多い項目は、表 2-3 のように、「刃物で脅す」(97.6%)、「なぐる、ける」(90.0%)、「性行為を強要」(88.6%)である。その後に「人格否定の言葉」(72.6%)、「なぐるふりで脅す」(69.5%)、「物を投げる」(69.4%)が続く。一方、「場合による」が多く、DV の認識の揺れが大きい項目は「言っても無視」(46.6%)、「大声でどなる」(45.3%)、「交友関係など監視」(37.4%)である。

女性の方が男性よりも暴力と認定する傾向が強い項目は、「大声で怒鳴る」(P=0.001)であり、次は「人格否定の言葉」(P=0.014)、「なぐる、ける」(P=0.033)である。つまり、これらの項目では、男性は女性よりも、「暴力でない」「場合による」と考える傾向が認められる。

表 2-3 DV の認識と男女の有意差検定の結果

	暴力でない	場合による	暴力である	N (有効票)	男女のカイ二乗検定
①なぐる、ける	0.8%	9.2%	90.0%	947	$\chi^2=6.834$ P=0.033 *
②物を投げる	2.0	28.5	69.4	939	$\chi^2=1.547$ P=0.461
③言っても無視	11.9	46.6	41.4	939	$\chi^2=1.715$ P=0.424
④大声で怒鳴る	7.2	45.3	47.4	938	$\chi^2=13.994$ P=0.001 ***
⑤人格否定の言葉	4.4	23.0	72.6	939	$\chi^2=8.556$ P=0.014 *
⑥なぐるふり	3.9	26.5	69.5	938	$\chi^2=3.300$ P=0.192
⑦刃物で脅す	0.9	1.6	97.6	939	$\chi^2=1.965$ P=0.374
⑧性的行為を強要	1.4	10.0	88.6	938	$\chi^2=3.742$ P=0.154
⑨生活費渡さない	7.2	24.8	68.1	937	$\chi^2=4.156$ P=0.125
⑩交友関係監視	9.7	37.4	52.9	939	$\chi^2=4.239$ P=0.120

* $\leq P=0.05$ ** $\leq P=0.01$ *** $\leq P=0.001$

DV 認識度を得点化により分類

以上のように、回答者が暴力とみなす割合は10項目の行為内容によって異なる。つまりそれは、暴力と認定する基準が高い人と低い人が存在していることを意味する。そこで、DVの認識度の高さでケースを分類するために、各項目について「暴力でない」と回答した場合は0点、「場合による」と回答した場合は1点、「どんな場合でも暴力にあたる」と回答した場合は2点として、各項目の合計得点を算出する。その合計得点に基づき、0～13点をI型：DV認識最低度、14～16点をII型：DV認識やや低度、17～19点をIII型：DV認識やや高度、20点をIV型：DV認識最高度、という4タイプに分類する。

DV認識項目のいずれの項目にも回答している場合を有効ケース（933件）とすると（つまり欠損ケース85件を除き）、I型のタイプの割合は16.5%（154件）、II型は27.4%（256件）、III型は31.0%（290件）、IV型は25.0%（233件）である。男女別でみると、女性ではIV型が多く、男性ではI型やII型が多い（ $P=0.050$ ）。

表2-4 DVの認識度による分類 男女別カイニ乗検定

	I型： DV認識最低度	II型： DV認識やや低度	III型： DV認識やや高度	IV型： DV認識最高度	合計ケース (実数)
全体*	16.5%	27.4%	31.0%	25.0%	100.0 (933)
女性	14.9	25.5	32.2	27.4	100.0 (525)
男性	18.5	30.4	30.1	21.0	100.0 (395)

*全体には、性別が「その他」「不明」の13ケースも含む。

$\chi^2=7.796$ $P=0.050$

2-5 ハラスメントやDVの被害体験とDV認識の相関関係の分析

これまで、ハラスメントやDVの被害体験の割合やDVの認識状況についての調査結果を概観し、さらにそれぞれについてタイプ分類を行ってきた。次は、これらの変数の間の関係性について分析する。

(1) DV被害体験とハラスメント被害体験の相関関係

DV被害体験頻度による6分類とハラスメントの被害体験度による4分類とのクロス集計をしたのが、表2-5である。DV被害体験の頻度が多い層ほど、ハラスメントの被害体験の項目数も多い（ $P=0.000$ ）。さらに、男女別で分析すると、男性の方がこの相関が強い（女性 $P=0.016$ 、男性 $P=0.000$ ）。

表 2-5 DV 被害体験頻繁による 6 分類とハラスメント被害体験 4 分類のクロス表

	I 型：ハラスメントなし	II 型：1 項目あり	III 型：2 項目あり	IV 型：3 項目以上あり	計 (実数)
I 型：DV なし	78.5%	11.6%	5.1%	4.8%	100.0 (N=455)
II 型：1 項目一時型	68.3	16.3	7.7	7.7	100.0 (N=104)
III 型：2 項目一時型	52.6	17.5	12.3	17.5	100.0 (N=57)
IV 型：3 項目以上一時	65.7	14.3	8.6	11.4	100.0 (N=35)
V 型：1 項目頻繁型	66.0	20.0	6.0	8.0	100.0 (N=50)
VI 型：多項目頻繁型	44.2	14.0	14.0	27.9	100.0 (N=43)

DV 被害を頻繁に受けていると回答している人ほど、ハラスメントの被害体験の項目数も多くなる傾向がみられる。男女別では、男性の方がその傾向が強い。つまり、DV 被害体験とハラスメント被害体験の間には統計的に有意差が存在する。

この結果から推測されることは、DV を受けていると感じている人は、ハラスメントの被害にも遭っていると認識する傾向があり、逆に、DV を受けていないと感じている人は、ハラスメントの被害にも遭っていないと認識する傾向があるということである。

(2) DV 被害体験と DV の認識度の関係

DV の被害体験項目と DV の認識項目とのクロス

つぎは、DV の被害体験項目と DV の認識項目とのクロスを取り、その有意関係について男女別にカイ二乗検定を行う。その結果、表 2-6 のように男性回答では、「なぐる・ける」の身体的暴力の項目では $P=0.000$ の水準で有意差がみられ、「なぐると脅す」「性的行為の強要」「生活費を渡さず」の項目でも、有意差が見られる。

男性回答者では、「なぐる」などの DV 被害を受けたと回答した人では、DV の認識では暴力とみなされるかは「場合による」と回答する割合が高くなっている。例えば、「なぐる・ける」の暴力を受けたことが「1~2 度ある」と回答した女性グループでは、その行為での DV 認識では「場合による」は 10.2% にすぎないが、男性グループでは 32.4% となっている。さらに、「何度もある」と回答した女性グループでは DV 認識では「場合による」は 13.5% であるのに対し、男性グループでは 44.4% と高くなっている。

表 2-6 暴力の内容項目別に見た DV 体験と暴力認識との関係のカイ二乗検定結果

DV の被害体験	問 13 暴力認識	女性の検定	男性の検定
身体的暴力	①なぐる・ける	$\chi^2 = 6.241$ P=0.182	$\chi^2 = 31.884$ P=0.000 ***
	②物を投げる	$\chi^2 = 3.410$ P=0.498	$\chi^2 = 13.241$ P=0.010 **
精神的暴力	③無視	$\chi^2 = 2.066$ P=0.724	$\chi^2 = 3.830$ P=0.430
	③怒鳴る	$\chi^2 = 5.426$ P=0.246	$\chi^2 = 3.932$ P=0.415
	④人格否定	$\chi^2 = 7.859$ P=0.097	$\chi^2 = 1.152$ P=0.886
	⑤なぐると脅す	$\chi^2 = 2.400$ P=0.663	$\chi^2 = 15.594$ P=0.004 **
	⑥刃物で脅す	$\chi^2 = 3.010$ P=0.556	$\chi^2 = 9.879$ P=0.043 *
性的暴力	⑦性的行為強要	$\chi^2 = 3.229$ P=0.520	$\chi^2 = 11.957$ P=0.003 **
経済的暴力	⑧生活費渡さず	$\chi^2 = 2.869$ P=0.580	$\chi^2 = 16.691$ P=0.002 **
社交の制限	⑨交友関係監視	$\chi^2 = 4.835$ P=0.305	$\chi^2 = 4.767$ P=0.312

* $\leq P=0.05$ ** $\leq P=0.01$ *** $\leq P=0.001$

以上の分析結果より、女性で暴力を何度も受けている層ではなぐることを「いつも暴力」と考える割合が高いが、一方男性では、なぐることを「場合によって暴力」と考える割合が高い。また男性では、「精神的暴力」「性的暴力」「経済的暴力」の認識とその各行為の暴力被害体験の有無の間に相関関係がある。表 2-7 のように、DV を受けている男性ほどその行為を「場合による」と考える傾向が強い。

表 2-7 経済的暴力被害状況×「生活費を渡さない」認識（男性の回答）

	生活費を渡さない	暴力でない	場合による	いつも暴力	計（実数）
経済的暴力	DV 体験なし	7.5%	25.7%	66.8%	100.0 (N=319)
	1~2 度ある	0.0	71.4	28.6	100.0 (N=7)
	何度もある	20.0	80.0	0.0	100.0 (N=5)

男性の場合は、「男は常に強くあれ」という規範意識が作用し、自分が DV 被害を受けていることを認めることは、「自分は弱い人間である」ということを証明する行為のように感じられるのではないだろうか。そのために、男性は暴力の認識に幅を持たせているのであろう。暴力を受けているとは言いたくないという心理が読み取れる。それが、男性による暴力相談件数の少なさにも表れているのであろう。

(3) ハラスメント被害体験と DV 認識との間の関係

ハラスメントの被害体験得点化による 4 分類と DV の認識度による 4 分類をクロス集計し、カイ二乗検定を行ったところ、その統計的有意差は見られなかった。さらに、量的変数の関連性を表す相関係数で、ハラスメントの被害体験得点と DV の認識度得点の間の関係を分析したところ、ピアソン相関係数は $R=0.043$ ($P=0.208$) であり、統計的な有意差は見られなかった。

以上より、DV 被害体験とハラスメント被害体験、DV 被害体験と DV の認識の間には、それぞれ相関関係があることがわかった。DV を受けている人はハラスメントの被害認識も強く、性別でみると男性の方がその傾向が強く見られる。

2-6 他の質問項目（変数）との関係

これまでに、①ハラスメント被害体験、②DV の被害体験、③DV の認識という、市民意識調査における3つの質問すなわち3変数についてタイプ分類を試みてきた。次は、これらのタイプ分類と他の調査項目とのクロス分析を行う。ここでは、紙幅の関係上、カイ二乗検定で統計的に $P \leq 0.010$ の水準の有意差がみられた調査項目を中心に取り上げる。

(1) ハラスメント被害体験タイプと他の変数との関係

年齢・家族・就労状況

- ・年齢に関しては、ハラスメントの「被害体験なし型」は「60歳以上」に多い。ハラスメント被害体験が2項目ある「被害体験中度型」や3項目以上ある「被害体験重度型」では「30～39歳」が多い（ $P=0.000$ ）。
- ・婚姻では、男性に有意差がある（ $P=0.009$ ）。「被害体験中度型」や「被害体験重度型」では「未婚」の割合が高い（ $P=0.009$ ）。
- ・家族類型では、「被害体験なし型」では「夫婦家族世帯」が多く、「被害体験重度型」では「1人世帯」が多い（ $P=0.003$ ）。
- ・子ども人数では「子どものない人」がハラスメントの体験をしている割合が高い。特に男性でその傾向が強い（ $P=0.002$ ）。
- ・末子年齢では、「被害体験なし型」は「子どもが高校生以上」層の割合が高い（ $P=0.000$ ）。
- ・配偶者の就労では、男性に有意差がある（ $P=0.000$ ）。男性の「被害体験なし型」では「配偶者が仕事なし」の割合が高く、一方「被害体験重度型」で配偶者が「仕事をしている」か「配偶者なし」の割合が高い。

以上のようにハラスメント被害体験は、「30～39歳」、「1人世帯」、男性の「未婚」や「子どものない人」で多い。一方「60歳以上」「夫婦家族世帯」「子どもが高校生以上」、そして「配偶者が仕事なし」（つまり妻が専業主婦）の男性では、ハラスメントの被害体験が少ない。

学校教育等に関する考え方

市民意識調査では、小・中学校において男女平等を進めるために行っている9個の取り組みを挙げ（①固定的役割分担を行わない、②個人の能力、個性、希望を大事にした進路指導、③自分を守る力を育む、④平等な家庭の責任を果たす、⑤情報を読み解き使いこなす力をつける、⑥性的マイノリティに対する配慮をする、⑦校長・教頭に女性を増やす、⑧男女平等教育に関する研

修の充実、⑨保護者会を通じて保護者への男女共同参画啓発)、その内で回答者が重要と思う活動に○をつけてもらった。

- ・ハラスメント被害体験タイプによって有意差がもっとも顕著に現れた活動は、「性的マイノリティに対する配慮」であった ($P=0.000$)。ハラスメント被害体験が2項目ある「被害体験中度型」では「重要だと思う」割合が高い。男女別のいずれにおいても有意差がみられる。
- ・「性別による固定的な役割分担を行わない」でも有意差が少し見られ ($P=0.028$)、「ハラスメントなし型」でやや「重要だと思う」割合が高い。
- ・「平等な家庭の責任」の項目では、女性で有意差がみられ ($P=0.037$)、「被害体験中度型」で「重要だと思う」割合が高い。
- ・「その他の取り組み」では、ハラスメント3項目以上の「被害体験重度型」で「重要だと思う」割合が高く ($P=0.017$)、特に女性で強い有意差 ($P=0.008$) がみられる。

このことから、学校教育の取り組みが重要と考えている人は、ハラスメント体験者に多い傾向があることが示されている。

職場環境

市民意識調査では、今の職場状況について、①労働時間の長さ、②賃金・諸手当での男女各差、③仕事内容での男女格差、④教育訓練機会の男女格差、⑤仕事と妊娠・出産、育児や介護などの両立するための制度、⑥セクハラ・マタハラ・パタハラ・パワハラの起きやすい職場風土、⑦女性管理職の登用という7項目から尋ねた。

- ・これら7項目のうち、ハラスメント被害体験型の相違による有意差が見られたのは、唯一「セクハラ・マタハラ・パタハラ・パワハラの起きやすい職場風土」の項目であった ($P=0.000$)。
- ・「被害体験なし型」では、セクハラなどの職場風土が「ない」と回答する割合が高く、一方、ハラスメント被害体験項目が多い層ほど、男女ともにセクハラなどの起きやすい職場風土で「ある」と回答している。

この結果から、第1に「回答者がセクハラなどの起きやすい職場環境に居るために、実際にセクハラ被害に遭うことが多くなる」という解釈が成り立つ。第2の解釈は、「セクハラ被害を受けたと回答した人は、ハラスメントに対して敏感な感性をもち、したがって職場に対しても厳しい基準を適用し、セクハラが起きやすい職場環境であると回答している」というものである。

男女共同参画に関する考え方

第1に市民意識調査では、男女の地位の平等性について、①法律や制度、②慣行・しきたり、③地域活動、④学校生活、⑤雇用の機会均等・職業選択、⑥賃金や待遇、⑦家庭生活、⑧政治・経済活動の8項目の指標から、それぞれに「男性を非常に優遇」「どちらかと言えば男性を優遇」

「どちらかというとな女性優遇」「女性を非常に優遇」の選択肢を設けて質問した。

- ・ハラスメント被害タイプの違いによる有意差が、①法律や制度、④学校生活、⑧政治・経済活動では $P=0.000$ の水準で、②慣行・しきたり、③地域活動、⑥賃金や待遇では $P=0.001$ の水準で、⑤雇用の機会均等・職業選択では $P=0.003$ の水準で、⑦家庭生活では $P=0.015$ の水準でみられ、ハラスメント被害体験のある項目が多いタイプでは「どちらかというとな男性優遇」されていると考える割合が他のタイプと比較して多いという傾向がみられた。

第2に市民意識調査では、「男は仕事、女は家庭の考え方」について尋ねた。ハラスメント被害体験なしのタイプでは性別役割分業観に「どちらかといえば賛成」が多く、ハラスメント被害体験のある項目が多くなるほど「どちらかといえば賛成」は減少し、「どちらかといえば反対」が増えている。

以上の結果から、ハラスメント被害体験の多い回答者ほど、伝統的な性別役割分業観には否定的で、社会・制度・家庭生活などあらゆる場面で、現在でも男性が優遇されていると捉える傾向が読み取れる。

(2) DV 被害体験頻発 6 タイプと他の変数との関係

年齢・家族・就労状況

- ・回答者の年齢に関して、I型の「DVなし」型は、年齢層が高いほど多い傾向が見られる。「一時型」の割合は「50～59歳」「60～69歳」の層で、「頻発型」の割合は「30～39歳」「40～49歳」の層で多くなっている ($P=0.016$)。
- ・婚姻については、特に女性では、「DVなし」型では比較的に「未婚」層が多く、「3項目以上一時型」と「多項目頻発型」では、「離婚・死別」層の割合が多くなる傾向にある ($P=0.001$)。
- ・子ども人数に関して、女性で有意差が見られ、「子どもがない」層では「DVなし型」が多い。また、「子ども1人」では「多項目頻発型」の割合、「子ども2人」では「3項目以上一時型」が、「子ども3人」では「1項目頻発型」が多くなる傾向にある ($P=0.003$)。
- ・末子年齢については、「小学生」がいる層では「多項目頻発型」の割合が多く、「高校生以上」の層では「一時型」が、特に「3項目以上」が多い ($P=0.013$)。
- ・就労状況に関しては、男性で有意差が見られる。「3項目以上一時型」では「正社員」が少なく、「流通・サービス」が多い ($P=0.008$)。
- ・配偶者の就労に関しては女性で有意差が見られ、「配偶者はいない」層では、他の層に比較して「3項目以上一時型」「1項目頻発型」「多項目頻発型」が多い ($P=0.026$)。

子育てに関する意識

第1に、子育て意識の設問では、子どもがどのように育てたいと思っているかを①積極性、②思いやり、③経済的自立、④特技、⑤責任感、⑥社会に役立つ、⑦身のまわり、⑧人前で

言える、⑨素直の9つの項目指標から、「主に女子に」「主に男子に」「両方に」「特になし」の選択肢を設けて質問した。以下の2項目において有意差が見られた。

- ・「経済的自立」の項目では、女性の「頻繁型1項目型」では「両方に」が少なく、「主に男子」がやや多い ($P=0.012$)。
- ・「人前可言える」の項目では、「頻繁1項目型」では「特になし」が、「多項目頻繁型」「主に男子」が少し多くなっている ($P=0.046$)。

第2に、性別観に関連して、①性別にこだわらず個性を伸ばす、②言葉使いや仕草は女・男らしく、③親の影響が大きい、④子どもの世話は男性でも女性でもできる、という4つの意見を提示し、それぞれに対して、「そう思う」「どちらかと言うとそう思う」「どちらかと言うとそう思わない」「そう思わない」の選択肢を設けた。

- ・「性別にこだわらず」では、男女ともに有意差がみられ (女性 $P=0.041$, 男性 $P=0.007$)、「DV 体験なし型」では、「そう思う」が他のタイプよりも多い。「子どもの世話は男性でも女性でもできる」では女性回答者で有意差が見られ、「3項目以上一時型」と「多項目頻繁型」で「どちらかと言うとそう思わない」が多く、「1項目頻繁型」では「そう思わない」の割合が多くなる傾向がみられる ($P=0.018$)。

男女共同参画に関する考え方・市の政策評価

第1に男女の地位の平等性の質問では、5項目で有意差がみられる。

- ・「雇用の機会均等・職業選択」では、特に男性のDV体験の「多項目頻繁型」では「女性を非常に優遇」とされていると考える人が多い ($P=0.000$)。
- ・「家庭生活」の項目では、「DV 体験ない」層では「女性が優遇されている」と考える人が多く、得点が高くなるほど「男性が優遇されている」と考える割合が多くなる。特に、女性にその傾向が強く ($P=0.000$)、「多項目頻繁型」では「男性を非常に優遇」の回答割合が高くなっている。
- ・「地域活動」の項目では、特に女性では、DV体験得点が高い層や「多項目頻繁型」では「男性を非常に優遇」とされていると考える人が多い ($P=0.014$)。
- ・「賃金や待遇」の項目では、特に男性の「多項目頻繁型」では「どちらかといえば女性を優遇」と考える人が多い ($P=0.014$)。
- ・「法律や制度」の項目では、「DV 体験ない」層では「どちらかという女性優遇」されていると考える割合が他の層と比較して多く、一方DV頻繁型では「どちらかという男性優遇」と考える人が多くなる傾向がある ($P=0.029$)。

第2の市の政策評価では、①男女平等が浸透、②子育て支援策が充実、③介護支援が充実、④男女共同参画が充実、⑤性に対する暴力への対応、⑥女性の健康保持の支援、の6項目から尋ねたが、1項目で有意差がみられた。

- ・「男女平等が浸透」の項目では、「DV 体験ない」層では「わからない」が多く、DV 体験得点が高い層や「多項目頻繁型」では「どちらかと言えばそう思わない」が多い（ $P=0.016$ ）。

(3) DV 認識タイプと他の変数の関係

年齢・家族構成

- ・年齢に関して、男性では、DV の認識度が「最低型」では「70 歳以上」が多く、「最高型」では「50～59 歳」が多くなっている（ $P=0.010$ ）。
- ・家族構成に関して、女性の DV の認識度が「最低型」では、「1 人世帯」や「夫婦世帯」が多い（ $P=0.008$ ）。

このように DV に関する認識度は、男性の回答者では年齢で、女性の回答者では家族構成で違いがみられる。

子育てに関する意識

- ・子育て意識に関する第 1 の「子どもがどのように育ってほしいか」の設問では、「やさしさと思いやり持てるように」の項目で有意差が最も見られ（ $P=0.002$ ）、「認識低型」「認識やや低型」では「主に女子に」がやや多く、「認識やや高型」「認識高型」では「両方に」が多くなる傾向がみられる。次に、「経済的に自立できるように」の項目で有意差が見られ（ $P=0.007$ ）、「認識低型」「認識やや低型」では「主に男子に」が多く、「認識やや高型」「認識高型」では「両方に」が多くなっていた。
- ・子育て意識に関する第 2 の子育て観の設問では、「子どもの世話は男性でも女性でもできる」の項目で最も有意差が見られ（ $P=0.000$ ）、DV の認識度が低い型ほど、「そう思う」が少なく、「どちらかと言うと思わない」「思わない」が多い。「認識高型」では最も「そう思う」の割合が高くなっている。次に、「親の影響が大きい」の項目で、「認識低型」では「そう思う」が少なく、「どちらかと言うと思わない」「思わない」多くなり、「認識高型」では「そう思う」が多くなる傾向がみられる。

以上の結果より、DV の認識度の低い人ほど子育てに「男らしさ」「女らしさ」のこだわりが見られ、一方、DV の認識度の高い人ほど性別にとらわれない子育てを望む傾向がみられた。

学校教育の取り組み

- ・DV 認識タイプによる学校教育の取り組み方の重視度の違いは、「個人の能力、個性、希望を大事にした進路指導」「男女平等教育に関する研修の充実」の項目を除いた 7 項目全てにおいて、DV 認識が高いほど「重要と思う」割合が高く、統計的有意差がみられた（ $P<0.010$ ）。特にその傾向は男性回答者で顕著である。
- ・男性の回答では、「性別による固定的な役割分担」「保護者への男女共同参画啓発」の項目では

有意水準が $P=0.000$ 、「性的マイノリティに対する配慮」「校長・教頭に女性を増やす」「男女平等に関する研修の充実」では有意水準が $P=0.001$ 、「自分を守る力を育む」「平等な家庭の責任」では有意水準が $P=0.003$ で、DV 認識タイプによる違いがみられ、「DV 認識高型」では「重要と思う」割合が高くなっている。

この結果から、DV の認識度の高い人ほど、学校における男女平等の取り組みが重要であると認識しており、特に男性ではその傾向が強くと現れている。

男女共同参画に関する考え方・知識

第1に、男女の地位がどの程度平等になっているかについての8項目の設問では、「雇用の機会均等・職業選択」「賃金や待遇」「政治・経済活動」の3項目を除き、他の5項目でDV 認識タイプによる有意差がみられた。

- ・「地域活動」では、「認識高型」で「男性を非常に優遇」が多い ($P=0.000$)。
- ・「法律や制度」や「慣行・しきたり」では、「認識低型」では「どちらかという女性優遇」されていると考える割合が他の型と比較して多く、一方「認識高型」では「男性を非常に優遇」と考える人が多い ($P=0.001$)。特に、女性回答でその傾向がみられる。

「男は仕事、女は家庭」という性別役割観の設問については、「認識低型」ではその考え方に「賛成」する割合がやや多く、「認識高型」では「反対」がやや多くなる傾向がみられた ($P=0.000$)。特に女性にその傾向が強い。

第2に、男女共同参画に関する知識に関しては14項目について設問したが、その中の「DV 防止法」の項目のみに有意差がみられ、「認識低型」では「知らない」の割合が高く、「認識やや高型」「認識高型」では「よく知っている」割合が多い ($P=0.001$)。

以上の結果から、DV の認識の高い人ほど、DV 防止法についての知識があり、「男は仕事、女は家庭」という性別役割観に否定的で、「地域活動」「法律や制度」「慣行・しきたり」などでは男性が優遇され男女平等の地位が実現されていないとする傾向があることがわかった。

3. 茨木市の男女共同参画の今後の課題

これまでの作業では、ローズ WAM の認知・利用状況から「利用型」「利用なし型」「不知型」と3タイプに分け、それぞれの型の特徴について分析した。さらに、セクシュアル・ハラスメント被害体験、DV の被害体験、DV の認識という3変数について、それぞれタイプ分けを行い、これらの関係性を明らかにするとともに、他の変数とクロス集計することでタイプの特徴を解析した。

これらの分析結果を踏まえ、茨木市の男女共同参画社会への今後の取り組みの課題について考察していこう。

男女共同参画社会作りの拠点としてのローズ WAM 施設の課題

ローズ WAM を利用している人とローズ WAM を知らない人の男女共同参画に関する意識をみると、利用している人ほど男女共同参画や市政に関心が高い傾向にあることからわかるように、男女共同参画の推進の拠点である男女共生センター ローズ WAM を活性化することは、茨木市の男女共同参画施策を推進するうえで重要である。利用者の現状を分析し、どのような層にどのような働きかけが有効なのかを考えてみたい。

ローズ WAM の利用者の傾向を男女別にみると、「利用型」の女性は、子どもがいる主婦やパート勤務であり、時間的に比較的余裕のある 40 代の女性の利用が多いことがうかがえる。「利用型」は他のタイプに比べて男女共同参画に対する意識が高いということからも、今まで通り、ワーク・ライフ・バランス講座やキャリアプラン講座などの自身の生き方を考え、意識に変革をもたらすような取り組みを地道に続けていくことが有効であろう。

「利用なし型」の女性は、「利用型」と比較して正規就労をしている割合が高いことから、知っていても利用する時間がない層であるといえる。これらの層には、夜間や休日に講座を開催するなど、ライフスタイルに合わせた企画が効果的であると考えられる。

「不知型」の女性は、未婚者や子どものいない既婚者で正規就労である若い層と、配偶者と離婚または死別した無職の高齢者層が他のタイプと比較して割合が高い。これらの層は、男女共同参画を必要と感じる優先順位が高くない層であると考えられるので、WAM 通信（男女共同参画について記載した情報誌）や広報紙、ホームページ、SNS など通じた情報発信を充実させるとともに、交流サロンや会議室利用など、講座やセミナーでなくても館に来た際に、「目にする」「手にとる」タイプの啓発が有効であると考えられる。

次に男性の利用者の傾向をみると、男性は女性に比べ、「利用型」「利用なし型」の割合が低く、「不知型」の割合が高い。男性の利用が少ないことの課題解決に向けて、「利用型」の男性にどのような特徴があるのかを分析してみた。すると、「利用型」の男性は、男女共同参画に対する意識が高いという点では女性と同様であるが、さらに社会活動に対して積極的であるとの特徴がみられた。つまり、社会活動の活性化とローズ WAM の利用は相関関係にあるといえる。そこで、自治会や防災などの社会活動に携わる男性にローズ WAM の利用を促すことにより、男女共同参画は広がりをもたせられるのではないだろうかと考えられる。これには、男女共同参画施策担当部署のみならず、市民協働推進課、危機管理課、子育て支援課など幅広い部署と連携した取り組みが重要である。

このように、男女を「利用型」「利用なし型」「不知型」とタイプに分けて分析することにより、それぞれのタイプが異なるニーズや環境におかれていることが判明した。つまり、画一的な取り組みでなく、それぞれの層・タイプに合わせた個別の事業展開をすすめることが、ローズ WAM の活性化につながる。それがひいては男女共同参画社会の実現につながっていくだろう。

DV・ハラスメントの取り組みの課題

昨今はDVへの関心が高まり、様々な組織が相談機能等を立ち上げるなど、被害者保護に向けての活動が活発になっている。しかし一方で、この度の市民意識調査の結果を分析すると、そもそも、DVを受けていてもDVと捉えることができない人が多くいることがわかった。これは、DVをしている側もそれを自覚していないということであり、看過できない状況であることが判明した。今後はこうした状況に対しても積極的に取り組んでいく必要があり、これが今回の分析で明らかになった第1の課題である。

先の分析結果でわかるとおり、男女共同参画や市政等に関心がある方々については、すでにDVに関する正しい知識が備わっているため、講演会や講座等、関心がある人を呼び込む形をとるような取り組みについては、現状のとおりで良いかも知れないが、一方で、これまで関心がなかった人にDVに関する認識を持ってもらう取り組みがこれまで以上に必要とされている。

第1に、男女共同参画や市政等に特に関心がないという方々への広報活動は難関ではあるが、現在、公共施設に設置しているポスターやパンフレット等をより様々な人の目に留まりやすい病院や駅等に設置するなど、地道な広報活動が必要である。第2に、地域や教育機関への出張型の講座を積極的に行うことも効果的であり、重要である。これらの取り組みは一朝一夕にはいかず、結果にすぐに結び付きにくい課題ではあるが、しっかりと根気強く取り組んで行かねばならないと考える。

ところで、この市民意識調査の結果を詳しく分析したことにより気づくことができたもう一つの大きな課題は、DVを受けている男性への支援である。DVを受けている男性は、暴力の認識において、なぐることを必ずしも暴力とはとらえずに、「場合による」と多くが回答している。このことは何を意味しているのであろうか。「男性が暴力を受けるなんておかしい」という性別による固定観念に縛られ、自分自身が「暴力の被害者である」という認識をすることが妨げられているのではないだろうか。女性だから男性だからという固定的な性別役割分担意識の解消を図れるよう地道な広報・啓発活動が求められている。さらに、男性にとってはDVについて相談すること自体が高いハードルになっていることがわかった。男性が相談しやすくなるようなサポートシステムや啓発活動を編み出していくことが重要である。

だれもが性別による固定観念に縛られることなく、またDV等による不快な思いをせずに、その人らしく生き生きと過ごせるように、茨木市の人権・男女共生課の職員として、また茨木市男女共同参画推進審議会委員として、今後も尽力したいと思う。

謝辞

「平成28年度茨木市男女がももにつくるまちづくり市民意識調査」の結果データを提供し、そのデータの使用・分析を認めてくださった茨木市 市民文化部 人権・男女共生課に対し、心よりお礼申し上げます。

註

- (1) 本意識調査の概要は、以下のとおりである。①調査対象：市内在住の満20歳以上の市民、②標本数：2,000人、③抽出方法：住民基本台帳に基づく無作為抽出、④調査方法：郵送によるアンケート調査、⑤調査期間：2016年8月17日～9月2日、⑥調査項目：子育てや学校教育、家庭生活・仕事・社会活動・介護等、男女の人権、男女共同参画に関する意識・政策、茨木市の取組。⑦回収数と回収率：女性572票（57.4%）、男性433票（43.2%）、性別不明18票、全体1018票（50.9%）。なお、男女別・年齢別の単純集計結果は、http://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/shimin/jinken/menu/danjo_kyodo/houkokusyo.html で公表している。
- (2) なお調査票では、「配偶者・パートナー」と「恋人」のそれぞれに回答するようにデザインされていたが、「恋人」については記入ケースが非常に少なかった。そこで、夫婦間と恋人間のデータを統合し、両方に記入のある場合は、夫婦間のデータを採用することにした。

2017年11月29日受理